〔千葉医学　92：38，2016〕

〔編集後記〕

千葉大医学部では「2023年問題」への対応が進められています。「2023年問題」は，日本の医学部を卒業しても，アメリカ医師国家試験（USMLE）受験資格が得られなくなるという問題です。これまでは，日本の医学部を卒業すると自動的にUSMLE受験資格が得られたのですが，2023年以降は「国際基準」を満たした医学部の卒業生にだけ受験資格が与えられることになります。日本の医学部教育が，「国際基準」に達していないという烙印を押されたというわけです。（正確には，この変更はカリブ海沿岸国の医学部卒業生を念頭においたものであり，日本を標的にしたものではないと聞いています）。千葉大学では，田邊名誉教授が中心となって早い段階から「国際基準」に対応するための医学教育改革について検討を始めました。その結果，「国際基準」を満たしたカリキュラムが整備され，このカリキュラムへの移行が計画的に毎年次着実に進んでいます。これにより，2023年度卒業生はUSMILの受験資格を得ることができる見込みです。このような制度上の改革に加えて，その他にもさまざまな改革が進んでいます。そのひとつは，「国際化」であり「英語化」です。民間の講師を招き，英語で論文を書くための講座が開設され，大学院での講義の一部は英語で行われています。国際的に活躍できる人材の育成は千葉大学の使命でもあります。とは言え，日常目にするのは日本語です。各種の申請書類，カルテ記載，和文論文を読んでいると日本語の表記に疑問を感じることがあります。主語と動詞の不一致，修飾語の位置，句読点の欠如，文語調表現の混在などレトリック上の問題ほか，論点の整理が不十分でロジックに問題があると思われるものなどがあります。医学部や大学院でも日本語を書くトレーニングが必要なのではないかと感じています。さらに最近では，わかり易さなどのメリットから英語のロジックやレトリックを採用した和文論文も多くなりました。和文といえどもトレンドがあり，変化し続けています。一生涯学習を続けなくてはなりません。

千葉医学雑誌は，日本語と英語のハイブリッドになっています。国際化を反映した留学記が定期的に掲載されています。今回の留学記は大島拓先生のGenevaからの報告です。Genevaには国際連合の建物が立ち並んでいて，大島先生の報告はまさに「国際化」都市からの報告です。雑誌中ほどには第7回の千葉医学会奨励賞受賞者2名の総説が掲載されています。小澤公哉先生の心筋の線維化に関する画像診断法開発，西織浩信さんの椎間板性腰痛機序に関する論文の2編です。このうち西織浩信さんは，医学部5年生でその文章には推敲を重ねた跡を読み取ることができます。より良い日本語の論文を書くトレーニングの機会を千葉医学雑誌が提供したものであり，千葉医学の今後のあり方を考える上で参考になる事例です。千葉医学雑誌がこれからも様々な形で，大学人と学問の発展に寄与していくことを願ってやみません。

（編集委員　生水真紀夫）